R. Browning の "The Statue and the Bust" の持つ真(まこと)の意味について.

渡 邊 清 子

はじめに

かつて Wm. Lyon Phelps が "No poem of Browining's has given more trouble to his whole-souled admirers than "The Statue and the Bust": and yet, if this is taken as a paradox, its meaning is abundantly clear"(1)と言ったことがあるが，それについては後に詳細に述べることにする。確かにこの作品が19世紀後半の Victoria 朝時代に書ゝれたものとしては，多少物議をかもしだしたとしても，止むを得なかったかもしれない。本論文に於いては，初めにこの題の背景になっている物語りを，よく理解するために，注意深く詩行を追って，半ば訳しながら，その大意をのべてみたい。そして詩人がこの作品の中で何を「真(まこと)」としているかを探り，当時代の人々の持った問題点に対し，詩人が与えた解答に耳を傾けてみることにする。

"The Stantue And The Bust"(2)

この「騎馬像と胸像」は1855年11月15日に初めて *Men and Women* の中に所載出版されたロマンテックな絵画的な物語詩である。内容は半ば伝説にも

(1) William Lyon Phelps; *Robert Browning, How to Know Him* (The Bobbs−Merrill Co., Indianapolis, 1915) p. 272.

(2) 本論文に引用される詩行は凡て下記の全集による。題名のこの詩はVol. 3 の pp. 393〜402に所載されてある。
Sir F. G. Kenyon, (With introductions by) ; The Works of Robert Browning; Centenary Edition in Ten Volumes, (Ams Press, Inc., New York, 1966)

とずいたものであるが，Browning 独特な豊かな想像力によってフィクション的な要素がかなり含まれていると言われる。この詩には，4行よりなる最後の連をのぞいて，全部3行よりなる連が83もある。250行よりなるかなり長いこの詩のrhyme schemeはABA, BCB, CDC, DEDと続き，最後のところではXYX, YZYZと結ばれている。韻律はanapaestを交えたiambic tetrameterが主であるので比較的読みやすい。Symonsはterza rimaで書ゝれたこの詩を "Despite the difficulty of the metre the verse is singularly fresh and musical." と称え，更にこれを "…one of Browning's best narratives"(3)とほめている。

Phelpsはこの詩が多くの善良な人々を困惑させたのは "…it seems (on a-very superficial view) to sympathise with unlawful love;"(4)だからだ，つまり不法な愛に肩入れしているように見えるからだという。しかしそれがBrowningの本心であったかどうか，やはり物語の内容をよく読んでみる必要がある。先づ語り手は次のように話し始める。

There's a palace in Florence, the world knows well
And a statue watches it from the square,
And this story of both do our townsmen tell.

(ll. 1－3)

人々に良く知られていた宮殿（当時のRiccardi Palace, 今のPalazzo Antinori）はフロレンスにあった。それと向かい合った広場Piazza dall' Annunziataに1つの立像が立っていて，宮殿の1つの窓の辺りにその視点はしっかり向けられていた。この宮殿と馬上姿の立像とにまつわる話を市民が物語って聞かせてくれるというのである。F. G Kenyonによればこのstatueは Duke Ferdinandの姿をかたちどったもので，当代一流の彫塑家Giovanni da Bologna又一名Jean de Douaiによって制作されたものだということである。Kenyonは更に物語について "The story is based on a tradition associated with the

(3) Arthur Symons; *An Introduction To the Study of Browning* (J. M. Dent & Sons Ltd., London, 1923) p. 127.
(4) William Lyon Phelps; *ibid.*, p. 273.

statue ,…, for the bust…there is no warrant in the tradition." (5)と胸像はまさしくBrowningの独自の創作であったことを明らかにしている。

De Vaneが言うように，この詩がいつ書ゝれたか明瞭ではないが，詩の中に言及されている場所とか，伝説の内容はBrowningが1847年4月にフロレンスに来て間もない頃に耳にしていたことは確かである。しかし詩人は彼らしい流儀で「市民の語り草」という形式を用いて書いている。De Vaneもやはり "The legend does not give Browning warrant for the bust of the lady, though there is an empty shrine under the window, and artistic balance demanded the bust." (6)と述べている。Harringtonは "The bust seems to be Browning's invention. He admits there's none there now." (7)と簡単に言い切っている。しかしSutherland Orrは胸像のことにつき次の如く証言する。"He (Browningの意) leaves the "bust" in the region of fancy, by stating that it no longer exists. But he tells us that it was executed in "della Robbia" ware, speciments of which, still, at the time he wrote, adorned the outer cornice of the palace." (8)と。"della Robbia" というのは "terra-cotta" 焼（テラコッタ焼，つまり赤土の素焼にエナメル塗料をつけたもの）のことだそうである。以上でBustのことはさておき，物語の本筋に入って行くことにする。

Ages ago, a lady there,
At the farthest window facing the East
Asked, "Who rides by with the royal air?"

(ll. 4－6)

(5) Sir F.G. Kenyon; *ibid.*, Vol. 3, p. xliv.
(6) William Clyde De Vane; *A Browning Handbook* (F. S. Crofts & Co., New York, 1935) p. 208.
(7) Vernon C. Harrington; *Browning* Studies (Richard G. Badger, The Gorham Press, Boston U.S.A., 1915) p. 117.
(8) Sutherland Orr; *A Handbook To The Works of Robert Browning* (G. Bell And Sons, London, 1927) p. 206.

The bridesmaids' prattle around her ceased;

She leaned forth, one on either hand;

They saw how the blush of the bride increased—

(ll. 7－9)

昔Riccardi家に嫁いで来たばかりの花嫁が，宮殿の東向きの一番端の窓辺から下をのぞいて見ていた。その時，1人の立派な凛々しい馬上姿の若い青年が通りすがるのをみとめた，そしてあれはどなたかと尋ねた。

彼女の結婚式に介添として，はべらせた2人の腰元達は左右に従っていたが，ぴたりとおしゃべりを止めて，窓から体をのり出してみている女主人をみた。彼女らは花嫁の頬の赤らみの増すのを見てとった。

They felt by its beats her heart expand—

As one at each ear and both in a breath

Whispered, "The Great-Duke Ferdinand." (9)

(ll. 10－12)

That self-same instant,underneath,

The Duke rode past in his idle way,

Empty and fine like a swordless sheath.

(ll. 13－15)

腰元達は新夫人の胸の動悸で，彼女の胸の高鳴りを感じた。そして同じに一気に，「フェルディナンド公爵様でございます。」と囁いた。

丁度同じその時，窓の下を公爵がゆったりと馬に跨って来た。まるで刀身のない鞘の如くに，邪心なく，貴公子然として。

Gay he rode, with a friend as gay,

(9) Harrington は Duke Ferdinand I (Ferdinand de' Mediti) は1549年に生まれ，彼の兄 Francesco I の後をついで1587年に Grand Duke of Tuscany の位につき，1609年に死んだ，と記している。彼は在世中，善政を行い，その繁栄に寄与したため大いに人望を高めたと言われている。Berdoe は "Ferdinand I was Grand Duke of Florence" (p. 520) と言い，DeVane は彼の没年を1608年 (p. 208) としている。

Till he threw his head back— "Who is she?"

— "A bride the Riccardi[10] brings home to-day."

(ll. 16—18)

公爵ははでやかに乗って行く，彼の友と同じようにはでやかに。彼はさっと振り返り，「あのひとは何者」と聞いた。「リカルディが今日お連れして来た花嫁です」との答があった。

その美しい花嫁の姿をBrowningは次のように描く。

Hair in heaps lay heavily

Over a pale brow spirit-pure—

Carved like the heart of the coal-black tree,

(ll. 19—21)

Crisped like a war-steed's encolure—

And vainly sought to dissemble her eyes

Of the blackest black our eyes endure.

(ll. 22—24)

あたかも黒檀の心(しん)から彫り出したかのような彼女の髪は，ふさふさと重く，妖精のそれのように純潔で蒼白な額の上に置かれていた。彼女の黒髪は軍馬のたて髪のように波打っていて，我らの眼が持ち得る最大限の美しい黒さを目立だたせまいとするかの如くであった。

And lo, a blade for a knight's emprise

Filled the fine empty sheath of a man,—

The Duke grew straightway brave and wise.

(ll. 25—27)

---

(10) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931) p. 521. に曰く "*Riccardi;* a noble family of Florence. 'The Palazzo Riccardi, a proud and stately residence, was begun in 1430 by Coimo dei Medici. It remained in the possession of the family till 1659, when they sold it to Gabriele Riccardi; but towards the end of the last century it was bought by the Grand Duke,…'"

He looked at her,as a lover can;

She looked at him,as one who awakes:

The past was a sleep,and her life began.

(ll. 28－30)

するとみよ！騎士の進取の気性（enterprise）にふさわしい刀身が，人の見事な空ろな鞘の中に入った。太公はたちまち勇敢になり，賢明になった。彼は彼女をみた。恋人だけがするように。彼女も彼をみた。初めて目が覚めたものゝように。過去は眠りの如きものであって，今こそ生きた彼女の生活が始まったのであった。

Now, love so ordered for both their sakes,

A feast was held that selfsame night

In the pile which the mighty shadow makes.

(ll. 31－33)

さて愛がこの２人のためにそう命じたのであろうか。大きな影を投じている高層な大建築の中で，まさにその夜，晩餐の宴が催された。

Browningのいつものくせとでも言うべきか，彼は物語の本筋に直接深い関係があるとも思われる次の二連で，この大きな暗い影を投じている建物にまつわる歴史的な説明を加えている。しかしこれはこの若い２人の不幸な未来を暗示するために用いた詩人の１つの道具立てと思えぬこともない。

(For Vis Larga is three-parts light,

But the palace overshadows one,

Because of a crime which may God requite!

(ll. 34－36)

To Florence and God the wrong was done,

Through the first republic's murder there

By Cosimo and his cursed son.)

(ll. 37－39)

なぜならばヴィア・ラルガ通りの四分の三は明るいが，宮殿の影がその一角に覆いかぶさるように暗い陰を落としている。それは神が懲罰し得る罪の故であった，と伝えられている。

その罪とはMedici家の祖先Cosimoと，その呪われた息子とによって，当時のフロレンス共和国が亡ぼされ，神と人とに対する反逆と謀反が行われたということである。つまりこれは非行に対する神罰の証拠である，と市(まち)の人々はいうのである。

The Duke (with the statue's face in the square)
Turned in the midst of his multitude
At the bright approach of the bridal pair.

(ll. 40−42)

今広場で立っている立像そっくりの顔をもつ公爵は，多数の来客に取り囲まれながら，はれやかに近ずいてくる結婚して間のない2人の方を振り向いた。(11)

Face to face the lovers stood
A single minute and no more,
While the bridegroom bent as a man subdued−

Bowed till his bonnet brushed the floor−
For the Duke on the lady a kiss conferred,
As the courtly custom was of yore.

(ll. 43−48)

遠くから互に初めて相見た時，一目惚れしてしまった恋人同志（公爵と新夫

(11) Edward Berdoe; *ibid.*, p. 517. この夜の宴についてBerdoeは "That night there was a feast in the house of the bride, and the Grand Duke was present" と記している。が筆者は研究社英文学叢書の *Browning poems* 1925年発行，p. 364にある「…晩宴会があった。そこへ Riccardi 夫妻も招かれた。」という解釋の方に従いたい。ll. 40〜48を読んでそう判断する。

人）はこゝで初めて顔を合せることになった。しかしそれはほんの一瞬の出合いで，それより長くはなかった。花婿のRiccardiは恐れ入った様子で，つばの広い帽子が床の上を払うまで低く，腰を屈めてお辞儀をした。彼がそうしたのは公爵がその夜夫妻を招待してくれ，更に新夫人に対して，古式の礼に従って口付けを賜ったからだったらしい。

In a minute can lovers exchange a word?
If a word did pass, which I do not think,
Only one out of the thousand heard.

(ll. 49−51)

That was the bridegroom. At day's brink
He and his bride were alone at last
In a bedchamber by a taper's blink.

(ll. 52−54)

公爵と新夫人（恋人同志）が互に顔を合せた一瞬の間に，はたして言葉が交せられるだろうか。私はそんなことは出来ないと思うが，もし１口でも言葉が交されたとしても，千人の中の１人にしか，それは聞かれなかったであろう。ところがその１人とはまさに新郎（夫）に，であった。彼は聞き捨てならぬことを聞いたらしい。

１晩中続いた宴会から夜が今まさに明けようとする頃，夫妻は家に戻って来て，やっと２人切りになれた。ろうそくのちらちとまたゝく寝室の中で向い合って。

Calmly he said that her lot was cast,
That the door she had passed was shut on her
Till the final catafalk repassed.

(ll. 55−57)

夫は公爵に対する妻の心のゆらぎを察知してか，静かに冷静に，彼女の運命は定まったことを宣告した。つまり彼女が今通って入って来た扉は，彼女の屍

をのたせ輿が運び出される時まで閉ざれて，再び開かれることはない，というのであった。

The world meanwhile, its noise and stir,
Through a certain window facing the East,
She could watch like a convent's chronicler.

(ll. 58－60)

Since passing the door might lead to a feast.
And a feast might lead to so much beside,
He, of many evils, chose the least.

(ll. 61－63)

以上ll. 58－63までは嫉妬深い夫が妻に命じたことの内容を話している所である。彼女が幽閉されている間，東に面している一定の窓を通してのみ，外界の騒音やどよめきを，尼僧院の記録係がするように，のぞいてみることが許された。というのは，もし扉から外界に出れば，それは饗宴へとつながって行く。更に饗宴は他のそれ以上の饗宴へと導かれて行く。だから彼は悪意のうちでも一番軽いのを彼女に与えたのだと告げたのであった。

"Freely I choose too," said the bride－
"Your window and its world suffice,"
Replied the tongue, while the heart replied－

(ll. 64－66)

"If I spend the night with that devil twice,
"May his window serve as my loop of hell
"Whence a damned soul looks on paradise!

(ll. 67－69)

新夫人は「私もむしろ望んでそうしていたゞきましょう」と言った。「あなたがきめられたその窓と，それから望める世界だけで十分でございます」と口ではそう答えながら心では，「もし私があの悪魔とこゝでもう一夜すごすなら，

彼の示したあの窓が，天国をのぞいてみる地獄の小窓となってくれますように！」と悲痛な気持になって願った。そして次のように希望をのべる。

"I fly to the Duke who loves me well,

"Sit by his side and laugh at sorrow

"Ere I count another ave-bell.

(ll. 70−72)

" 'T is only the coat of a page to borrow,

"And tie my hair in a horse-boy's trim,

"And I save my soul−but not to-morrow"−

(ll. 73−75)

「私は私を愛していて下さる公爵様の所に飛んで行きましょう。あのお方のお側に座って，悲しかったことどもを笑いとばしたいのです。今宵も又夕べの祈りの鐘の音を数える間に。そうするためには私はたゞ小姓の上衣を借りて男装し，少年馬子のように，髪を短く丸め込めさえすればよいのです。そうすれば私は私の魂を救えるのです。−けれど明日は駄目。」と新夫人は夫から逃亡することを願いながらも躊躇してそれを実行し得なかったのである。("She checked herself and her eye grew dim) 1.76. 彼女ははやる気持を抑えた，そして眼は涙でかすんでしまったのであった。

"My father tarries to bless my state:

"I must keep it one day more for him.

(ll. 77−78)

"Is one day more so long to wait?

"Moreover the Duke rides past, I know;

"We shall see each other, sure as fate."

(ll. 79−81)

夫人が思うまゝに動けなかった理由を次のように弁明し，自らを慰めようとした。

「私が嫁いでくる時，私を送って来て下さったお父様は，高くなった私の身分を祝福され，まだこの地に止まっておられるのです。だから私はもう1日，彼のため，私の身分を保っておかねばならないのです。」と。更に彼女は続けて，「もう1日待つことが，そんなに長いのでしょうか。まして公爵様は馬に乗られて，お通りになることを私は知っています。私達はその時，お互に相見ることが出来るのですもの。運命の如く必ず。」と力強く言った。

She turned on her side and slept. Just so!
So we resolve on a thing and sleep:
So did the lady, ages ago.

(ll. 82−84)

That night the Duke said,"Dear or cheap
"As the cost of this cup of bliss may prove
"To body or soul, I will drain it deep."

(ll. 85−87)

それから彼女は寝返りをうって眠ってしまった。全くそのまゝに。我々もこのように物事の対して，心のけじめをつけて眠りにつくものである。幾世代前に新夫人がしたように。

その夜，公爵は次のように言った。「夫人に捧げるこの愛の杯の値が高かろうとも，低かろうとも，我が肉体に危害を与え，或は魂を傷つける程の高価なものになろうとも，それを飲み干してしまおう。」と。そして

And on the morrow, bold with love,
He beckoned the bridegroom (close on call,
As his duty bade, by the Duke's alcove)

(ll. 88−90)

翌朝，愛の力によって大胆になった太公は，新郎のRiccardi[12]を招き寄せた。(新郎は職務上，呼ばれたらすぐ応じられるように，太公の部屋近くには

(12) Riccardiはフロレンスの貴族でFerdinand太公の宮廷に仕えていたらしい。

べっていなければならなかった。)

And smiled " 'T was a very funeral,

"Your lady will think, this feast of ours,—

"A shame to efface, whate'er befall!

(ll. 91—93)

"What if we break from the Arno bowers,

"And try if Petraja, cool and green,

"Cure last night's fault with this morning's flowers?

(ll. 94—96)

公爵は彼に向かって微笑し,「昨夜の我々の饗宴はまるで葬儀のようだったとあなたの御夫人は思われたでしょう。どのようにしてでも,この恥を拭い去らねばならない!我々は一緒にArno湖畔にある邸から,緑り深く,涼しいPetraja (pítra:ja) 別荘に行き,今朝咲いたばかりの美しい花によって,昨夜の失礼を償わして貰えるかどうか試してみたい,どうだろう。」と誘いかけた。

The bridegroom, not a thought to be seen

On his steady brow and quiet mouth,

Said, "Too much favour for me so mean!

(ll. 97—99)

新郎はそのしっかりした額や静かな口元に,心中にある思いを少しも表わさず「私の如く卑しき者に対して,身に余る御好意でございます。」と感動してみせた。そして程よい理由を作って申し出を辞退しようとした。

"But, alas! my lady leaves the South;

"Each wind that comes from the Apennine

"Is a menace to her tender youth:

(ll. 100—102)

"Nor a way exists, the wise opine,

"If she quits her palace twice this year,

"To avert the flower of life's decline."

(ll. 103−105)

「ですが，困ったことに，私の妻は南国の出です。それでアピイナイン山から来る風はどれも若くて，きゃしゃな彼女にとって毒になります。賢き方の申しますには，彼女が今年再び宮殿を出て行くならば，彼女の美しい花の生命の衰えを防ぐ方法は全くないとのことです」という。

Quoth the Duke, "A sage and a kindly fear.

"Moreover Petraja is cold this spring:

"Be our feast to-night as usual here!"

(ll. 106−108)

「何と賢い親切な配慮であろうか。その上，ピトラーヤの山の今年の春はまだ寒い。今夜の晩餐会はいつものように此所でしよう！」と大公は仰せられた。Riccardiの妻にもう一度会いたいと願ったのを，うまくはぐらかされた太公は次の如く独り言をいう。

And then to himself−"Which night shall bring

"Thy bride to her lover's embraces, fool−

"Or I am the fool, and thou art the king!

(ll. 109−111)

"Yet my passion must wait a night, nor cool−

"For to-night the Envoy arrives from France

"Whose heart I unlock with thyself, my tool.

(ll. 112−114)

「汝の花嫁を，いつの夜になれば，彼女の恋人である私の腕に抱くことが出来ようか。馬鹿者めが−もしそう出来なければ，私は愚かなるもの，そして汝は王である！しかしこの私の情熱にもかかわらず，1夜待たねばならない。この情熱が冷えてしまってはならぬのだが。−なぜなら今宵はフランスの大使がこゝに来られる。その大使の胸のうちを，私の単なる道具にすぎない汝と一緒

に，聞くことになっているのだから。」

"I need thee still and might miss perchance.

"To-day is not wholly lost, beside,

"With its hope of my lady's countenance:

(ll. 115－117)

"For I ride—what should I do but ride?

"And passing her palace, if I list,

"May glance at its window—well betide! "

(ll. 118－120)

「Riccardi, 汝は私にとって必要だ。いないと不自由だ。しかし今日という日が全く無駄になったわけではない。その上，私には恋するRiccardi夫人のお顔をみるという希望がある。私は馬を走らせることが出来るのだ。－馬を走らせる以外にどうすればよいのだろうか。私は気のむくまゝに，彼女の宮殿の前を通って行く。そして彼女の窓を見上げることが出来る。うまく会えるようにと，ねがって！」こゝで公爵の長い独言は終るが，彼は必ず夫人に会える手立てを実行にうつそうと決意した。

So said, so done: nor the lady missed

One ray that broke from the ardent brow,

Nor a curl of the lips where the spirit kissed.

(ll. 121－123)

Be sure that each renewed the vow,

No morrow's sun should arise and set

And leave them then as it left them now.

(ll. 124－126)

公爵はそう言って，そう実行した。一方夫人の方も馬上の太公の熱情を湛えた額からほとばしる輝きを見逃しはしなかった。又互の心のうちで，口付けを交わし合った互の唇の動きを見落しはしなかった。かくて２人は互に前夜心に

誓った "cup of bliss" (l. 86) を呑みほそうという誓約を新にした。もはや彼等が今日空しく実行し得なかった逃避行をしないまゝ，明日の太陽が昇って沈むことにないように，と。

But next day passed, and next day yet,
With still fresh cause to wait one day more
Ere each leaped over the parapet.

(ll. 127－129)

And still, as love's brief morning wore,
With a gentle start, half smile, half sigh,
They found love not as it seemed before.

(ll. 130－132)

ところが彼らは出てくる新しい用事にさまたげられて，もう一日だけ後に実行しようと逡巡し，思い切って胸壁を飛び越える決断がつかぬ間に，次の日も，その次の日も，空しく過ぎ去った。Browning は後でこの時の2人の優柔不断さをきびしく指摘する。

やさしく驚いたり，半ば微笑えんだり，半ば歎息したりして，日がすぎて行くうちに，よくあることだが，恋の炎は，きらきらと燃えさかる日の出の勢の如く，束の間に消え失せてしまう。そして2人は彼らの愛は以前のようなものでなくなってしまったことに気ずいたのである。

They thought it would work infallibly,
But not in despite of heaven and earth:
The rose would blow when the storm passed by.

(ll. 133－35)

しかし彼らはいつか彼等の恋は絶対に間違いなく実るだろうと思っていた。嵐がすぎれば，ばらの花は咲き出でるものだと。それでも彼らを取り巻く天や地，つまり運命や世間というものによってさまたげられることは確かで有る。しかもその力に打ち勝てぬ時もあると考えた。

Meantime they could profit in winter's dearth
By store of fruits that supplant the rose:
The world and its ways have a certain worth:

(ll. 136－138)

And to press a point while these oppose
Were simple policy; better wait:
We lose no friends and we gain no foes.

(ll. 139－141)

彼らの恋に味方しないこと，つまり換言すれば，ばらの咲き匂うのを邪魔立てするようなことが，度々起ころうとも，その間には，冬枯の時にでも貯えられた果実があるものだ。即ち忍耐と思慮分別という果實があたえられ，それによって道が開けることもあるものだ。若き2人の恋人達は，成程このように，この世にはこの世の習慣があり，又価値の高い常識というものがあると悟る。世間やそのしきたりに反して，自分たちの計画を，無理押しにすゝめて行くことは愚かなことである。それよりも時機の到来を待つに如かず。そうすれば我らは友を失うこともなく，敵を増すこともないと考えた時，2人は思ひ切った愛の行動を取ることが出来なかった。煮え切らない2人の態度を，Donald S. Hairは下の如く批判している。"The lovers in *The Statue and the Bust*, on the other hand, miss happiness entirely. Convinced that 'the world and its ways have a certain worth' (138), they evade the choice that confronts them, and remain caught in social complexities."[(13)]彼らはまさしく錯綜した社会のしがらみのとりこになってしまったのであった。

Meantime, worse fates than a lover's fate,
Who daily may ride and pass and look

(13) *Browning's Experiments with Genre* (Uni. of Toronto Press, Canada, 1972) p.82.

Where his lady watches behind the grate!

(ll. 142－144)

そうしているうちにも，恋人が窓の格子越しに彼の方を眺めている姿を，見上げながら，毎日馬を馳せつゝ通り行く公爵の運命より，新夫人のたどる運命の方が更に不幸であった。

And she－she watched the square like a book
Holding one picture and only one,
Which daily to find she undertook:

(ll. 145－1447)

When the picture was reached the book was done,
And she turned from the picture at night to scheme
Of tearing it out for herself next sun.

(ll. 148－150)

それからの新夫人は－彼女は人々の行きかう広場をまるで1冊の本をみているかのように眺めていた。しかし彼女のみるのはその本の中1枚のさし絵であった。それは公爵の写し絵，即ち窓外を行く太公の御姿であった。彼女は毎日その絵を見付けては，じっとそれを見つめていたのであった。それを見終ると，もう本には用がなかった。しかし彼女はその絵から目をそむけて夜になると，彼女は翌日にはどのようにしてその絵を破り取って，我がものにしようか，と考え続けるのであった。

So weeks grew months, years; gleam by gleam
The glory dropped from their youth and love,
And both perceived they had dreamed a dream;

(ll. 151－153)

Which hovered as dreams do, still above:
But who can take a dream for a truth?
Oh, hide our eyes from the next remove!

(ll. 154－156)

かくして幾週か過ぎ，月となり，月が重なって年となった。1瞬，1瞬，栄光の輝きが，彼らの青春と愛から薄れ去って行った。2人はかっての日，嵐がすぎれば必ずばらの花は咲き匂う，と確信して，互に耐えて来ていたのであったのに。しかし，結局それは彼等の実現し得ぬ夢を，ただ夢見ていたにすぎなかったということを認めなければならなくなった。我々は夢から覚めた時に，その夢の残影にまどわされることがしばしばある。しかし夢はやはり夢なのだから，誰でも最後には冷たい現実に，まことの状態に，もどされるのである。おゝ，しかし終にはどこまで幻滅の渕に2人の恋人達は落ちて行くのか，それは見るに耐えられぬ，とBrowningはどんなにか思わずには居られなかったのであろう。

One day as the lady saw her youth
Depart, and the silver thread that streaked
Her hair, and,worn by the serpent's tooth,

(ll. 157－59)

The brow so puckered, the chin so peaked,—
And wondered who the woman was,
Hollow-eyed and haggard-cheeked,

(ll. 160－162)

ある日夫人は彼女の青春が去るのを感じた。彼女の髪にはちらほらと幾条かの銀色に光る白髪が見え，そして少しずつ，蛇の歯にかみ取られたかの様に老の影が忍びよって来て，額は皺だらけになり，顎の肉が落ちて尖り，目が凹み，頬がこけていた。鏡の中に映っている自分の顔をみても，それが誰の顔であるか，彼女は訝った程であった。

Fronting her silent in the glass—
"Summon here," she suddenly said,
"Before the rest of my old self pass,

(ll. 163−165)

"Him, the Carver, a hand to aid,

"Who fashions the clay no love will change,

"And fixes a beauty never to fade.

(ll. 166−168)

彼女は静かに鏡に向かっていたが－突然「彼をこゝに呼び寄せよう。私の昔の面影が消え失せてしまわぬうちに,」と言った。(こゝでいう彼とは次の連のHimのこと),「彼，つまり塑刻家を，私を助けてくれる技術ある人を，粘土を固めて，恋の悩み故に衰えることない，永遠に変らぬ美を止めてくれる人を,」と彼女はなげく。次の6連にも悲痛な夫人の独語が続く。

"Let Robbia's craft[14] so apt and strange

"Arrest the remains of young and fair,

"And rivet them while the seasons range.

(ll. 169−171)

"Make me a face on the window there,

"Waiting as ever, mute the while,

"My love to pass below in the square!

(ll. 172−174)

「長い由緒ある伝統をもつ，かの有名な，妙なる不思議な技をもつロビア塑刻によって，未だに残っている私の青春を，しっかりと季節の続く限り，とゞめておいてほしい。

「あそこの窓の上に私の胸像を作らせて，置いてほしい。ずっと無言のまゝ,

(14) 岡倉由三郎・市川三喜主幹の研究社英文学叢書・*Browning Poems*（大正14年発行）pp. 370〜371.「Robbia's craft. Luca della Robbia (1400−82) が創始したterra cotta relief（堅く焼いた浮彫の陶器）にenamel（上薬）をかけ，初めは青又は緑地に白の浮彫だけであったが，後には種々のenamelを発明し，浮彫の部分にも着色するに至った。…此の話の時代には知られた名人は居なかった。それ故史實に基づいて居るものと考へれば，誰かその作風を伝へたdella Robbia wareの名匠を呼んだことになる。」

私の愛する公爵が下の広場をお通りになるのを，いつものようにお待ち出来るように！

"And let me think that it may beguile
"Dreary days which the dead must spend
"Down in their darkness under the aisle,

(ll. 175−177)

"To say, 'What matters it at the end?
"'I did no more while my heart was warm
"'Than does that image, my pale-faced friend.'

(ll. 178−180)

（身分のある）死者たちは教会堂の地下の歩廊で，甦りの日を待ちながら，気のめいるような日々を過ごしている。その彼等と次のように（ll. 178−180）話し合うことが出来れば，気が紛れるものだと考えたい。

つまり次の様に話せばよいのだ。「終にこうなってしまったからには，もうどうということはないでしょう。私はまだ心が燃え，胸の高鳴るのをおぼえていた頃，あの胸像に，即ち私に似た青白い顔をしたあの友に比べて，それのなし得るそれ以上のことは，何もしなかったのです。」と。

"Where is the use of the lip's red charm,
"The heaven of hair, the pride of the brow,
"And the blood that blues the inside arm−

(ll. 181−183)

"Unless we turn, as the soul knows how,
"The earthly gift to an end divine?
"A lady of clay is as good,I trow."

(ll. 184−86)

深紅の唇の魅力も，空の様に深々とした豊かな髪も，秀でた額も，白い腕の内側の血管の中を青く流れている血潮も，何の役に立つのだろうか。もし人間

の魂がすでに知っているように，我らが地上の賜物として与えられているこの肉体を，聖なる目的に叶うものとして用いないならば？もしそうしないならば，陶器で造られた胸像は，肉体に比べて全く遜色ないものと言えると私は思うのです。」と夫人はこゝで深い苦悩を訴えて言葉を終える。

Browningは日頃より霊肉が共に高貴であることを主張し，その2つが互いに影響し合って完全に一致する時，男女の最高のまことの愛が生れると，多くの作品の中で示して来た。なかでも霊肉一致の重要な問題について集中的にまとめて述べているのは，有名な“Rabbi Ben Ezra”の中においてであると思う。それで本論文の物語より多少横道にそれるようだが，2人の恋人の不幸の原因と直接関係があると思う1連を参考に引用して考察してみたい。

Let us not always say[15]
“Spite of this flesh to-day
“I strove, made head, gained ground upon the whole! ”
As the bird wings and sings,
Let us cry “All good things
“Are ours, nor soul helps flesh more, now, than flesh helps soul! ”
(St. xii, ll. 67−73)

以上を要約すれば次のようになる。「我らは肉体をもっているにもかゝわらず，難行苦行し，禁慾の行に徹する。そして幾分かの精進が出来た」と常に言わぬがよい。鳥が翼をもって，羽搏き歌う如く，我らも次のように歌おう。「善きものすべては我れのもの。霊が肉体を助けるが如く，肉体も霊を助ける。」と。

つまりBrowningは，この新夫人が美しいよき肉体を与えられているのに，あたらそれを無にして嘆きつゝ，無為に過ごしていることを，難じている。彼女は肉体をかけめぐる恋の熱き血潮に助けられて，霊的な飛躍をすべきであった。肉体が霊と同じく誉むべきものであるならば，それに助けられ高きに昇るのに，

(15) Sir F.G. Kenyon; *ibid.*, Vol. 4 p. 264.

何の躊躇が必要であったろうか。勇気をもって行動をすべきであったと言うのである。

さて恋人との愛の完成を果し得なかった彼女の晩年はどうであったか，物語の本筋に戻ってみよう。

But long ere Robbia's cornice, fine,
With flowers and fruits which leaves enlace,
Was set where now is the empty shrine—

(ll. 187－89)

さだかではないが，夫人の胸像が置かれてあったと言われる所に，現在は空虚な祠があるだけである。丁度その辺りにむかしRobbia家の誰かゞ建てたと言われる建物の軒辺に，美しい青葉に囲まれた花や果物に飾られた立派な蛇腹が，取りつけられてあったということである。

(And, leaning out of a bright blue space,
As a ghost might lean from a chink of sky,
The passionate pale lady's face—

(ll. 190－92)

Eyeing ever, with earnest eye
And quick-turned neck at its breathless stretch,
Some one who ever is passing by—)

(ll. 193－95)

上の2連では，もうなくなってみることの出来ない胸像に関することをBrowningは想像して次のように述べているのである。全く痛ましい限りの夫人の姿である。

(胸像の置かれている明るい青地の台の上から，体を乗り出して，空の隙間からのぞく幽霊のように，情熱的な青白い夫人の顔がのぞいていた。じっと動かぬ視線で，真剣な目付きで，恋しい人が通りはせぬかと，息もつけぬ程に，大急ぎで首を長くのばして。)

The Duke had sighed like the simplest wretch
In Florence, "Youth—my dream escapes!
"Will its record stay?" And he bade them fetch

(ll. 196—98)

Some subtle moulder of brazen shapes—
"Can the soul, the will, die out of a man
"Ere his body find the grave that gapes?

(ll. 199—201)

一方公爵はといえば，彼はフローレンス中の最も愚かな哀れな人のように，「我が青春一我が夢はにげて行く！若き日の記録は残し得ぬものか。」と歎息した。そして彼 は侍従達に，誰れか巧妙に，しっかりと，人の姿を形造ることの出来る塑像家を連れてくるように命じた。「人の肉体が入るのを待ちかまえている墓を，いまだ見いだせぬ中に，人の魂は，意志は，死に絶えてなくなってしまえるものだろうか？そんなことは有り得ぬ。」と彼は思うのだった。そして次のようなことを企画する。

"John of Douay shall effect my plan,
"Set me on horseback here aloft,
"Alive, as the crafty sculptor can,

(ll. 202—04)

"In the very square I have crossed so oft:
"That men may admire, when future suns
"Shall touch the eyes to a purpose soft,

(ll. 205—07)

"While the mouth and the brow stay brave in bronze—
"Admire and say, 'When he was alive
" 'How he would take his pleasure once!'

(ll. 208—10)

「デュエイのジョン[16]に我が企画を実施させよう。この広場の中に上空高く，堂々と，馬上豊かに，生けるが如き我が姿を，鋳造して貰いたい。すぐれた彫塑家の手によって，我れのしばしば横切りて，渡りしこの広場に：

「これより後の日に，太陽の光が銅像にさした時，その口元や額は凛々しくしているのに，その瞳の中に，もの軟らかな表情があらわれているのを人々が見て，大いに感動することが出来るように，作ってほしいものだ。

「又，人々がそれをみて，『太公が生きておられた時にはどんなにか多くの享楽にふけられたことだろう！』と賞め讃えることが出来るように作って貰いたいのだ」と注文をつけた。

"And it shall go hard but I contrive
"To listen the while, and laugh in my tomb
"At idleness which aspires to strive."

(ll. 211－13)

しかし太公は死して墓場の中で，人々があれこれと批評しているのを聞いていて，自分の生涯は決して，他人が外側からみて想像する程，幸なものでなかったと思うのである。出来ることなら，どうしてもRiccardi 新夫人との恋を成就させたい，と心あせりつゝも，無為に日々を終らせてしまった。どうしても出来ないことは仕方がないのではないかと，煮え切らないで踏ん切りのつけなかった己の無精振りを，今更の如く墓の中で悲しく笑わずにはいられない。太公は彼の恋も，人生も，夢の又夢であったと，冷たい幻滅の渕に立って，呻吟するのみであった。以上でこの物語りは終る。

W. L. Phelps はこの "statue" と "bust" について皮肉だっぷりに，"Now the statue and the bust gaze at each other in eternal ironical mockery, for these lovers in life might as well have been made of

(16) 「John of Douay〔du:'ei〕, Giovanni da Bologna (1530－1608) と呼ぶ當時一流の彫塑家。Ferdinand Ⅰの像は彼の傑作で，土耳古から分捕った大砲を材料にして鋳たということである。」(前記，研究社英文学叢書，*Browning Poems* p. 373による。)

bronze and stone; they never really lived."[17] とかなりひどい批評をしている。

愛の逃避行の誓も空しく，この物語りの主人公たちは，彼等の前に立ち塞がる無気力さ或は道徳的なためらいを打ち破って目的を果す勇気がなく，ついに老いて死んでしまった。その後の2人の魂の行方についてBrowningは次のように言及する。

So! While these wait the trump of doom,
How do their spirits pass, I wonder,
Nights and days in the narrow room?

(ll. 214－216)

この世の終る時，甦えりの喇叭が吹き鳴らされ，死者が皆，審判の座につくのを待つ間，2人の恋人たちの魂は，日夜狭い墓場の中でどのように過ごしているのであろうか。

Still, I suppose, they sit and ponder
What a gift life was,ages ago,
Six steps out of the chapel yonder.

(ll. 217－19)

Only they see not God,I know,
Nor all that chivalry of his,
The soldier-saints who, row on row,

(ll. 220－22)

Burn upward each to his point of bliss—
Since, the end of life being manifest,
He had burned his way thro' the world to this.

(ll. 223－225)

(17) William Lyon Phelps; *ibid.*, p. 274.

2人の魂は，いつも前に見える礼拝堂[18]から数歩はなれた所に座って，幾時代も前の自分達の人生が，いかに恵まれたものであったかを，考えているのだろう，と私は想像する。たゞ，私にわかっていることは，2人は決して神の姿をみることは出来ないということである。又生前によき僕(しもべ)として仕え，死しては，神の御前にはべることを許された聖者や戦士たちの姿をみることも出来ない。と，いうのは，これらの長蛇の列を作っている人々は，身も心も燃えつきるまで，ひたすらなる努力を重ね，召天の幸を許された人達ばかりであるから。2人の恋人たちはこれからの人々と肩を並べて行ける筈がない，と手厳しい。

Browningのこの厳しさにつき，Harringtonは次のように解説する。公爵とRiccardiの新妻は一目惚れし，駆け落ちをする約束をした。それは正に姦淫の罪を犯すことである。聖書のマタイ伝5章27～28によれば，「『姦淫してはならない』…しかしわたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は，すでに心の中で姦淫を犯したのです。」ということである。それ故2人が互に恋心を感じただけでも罪である。ましてや夫の目を盗んで不義を企らむとすれば論外である。しかし彼等はやるせなく募る思いを押さえつゝ，その企てを実行に移さなかった。その結果彼らの心はしなびて，縮んでしまった。Harringtonの結論は次のとおりである。

> "And their souls shrivelled. They were put to the test and failed. It tested them as surely as if it had been a good thing they delayed to do. Whatever has become of them, Browning is sure they do not see God nor have any place with those who "have dared and done:"[19]

つまり2人の男女の愛と，それを完成させようとする意志とが，どの位強い

(18) Church of Santa Maria degli Innocentiの境内に2人が埋葬されているものと作者は思っていたらしい。
(19) Vernon C. Harrington; *ibid.*, p. 118.

か，又それを実現させるため，どの位懸命な努力が拂われたかが試されたのであった。2人はその“test”に破れた。従って，一身を挺して，目標に向かって努力して行った前述の‘chivalry’(l. 221) たちと組することは不可能である，とBrowningは，Harringtonの説明したとおり，判断したのであった。この場合Browningにとって，2人の恋人たちの目指したものが，不義の恋であろうとなかろうと，全く問題ではなかったのである。彼が彼らの求めたのは愛に殉じ，「斃れて後已む」の気概に外ならない。この点が，当時の彼の多くの愛読者達に十分理解されず，不満と疑問とをとなえるに至らしめたのである。ある人々の如きは作者が姦通を奬励しているのではないかと，いぶかった程だったといわれる。ではこの物語の場合に於ける姦淫の罪と罰についての問題をBrowningはどう解明しようとするのか，Phelpsがparadoxicallyにメスを入れて説明して いるので，初めに紹介しておいたように，こゝで取り上げて考察したいと思う。

PhelpsによればBrowningはまれにしか彼の作品の後に個人的なpostscript（後記）を書かない。しかし読者が彼の作品を誤解するかも知れないと心配して彼の傑作“Bishop Blougram's Apology”及び本物語詩に後記（ll. 214－250）をつけた，とのことである。詩人がもし読者から，恋人達のその後の運命は？と尋ねられたら彼は「さだかでない。」と答えたそうである。

さて，Phelpsはどのようなparadoxを用いて説明しているか簡単にみてみよう。以下はPhelpsからの引用である。

> “Where are these lovers now? … I do not know where they are, says Browning, but I know very well where they are *not:* they are not with God. No, replies the reader, because they wanted to commit adultery. Ah, says Browning, they are not exiled from God because they wanted to commit adultery: they are exiled because they did not actully do it. This is the paradox.”(20)

(20) William Lyon Phelps; *ibid.*, p. 274

要約すれば，Browning が確かに言えることは，恋人達は神と共にいない，ということである。彼らが追放されたのは姦淫の罪を犯したからではなく，実際にそれを犯さなかったからである。こゝに“paradox”があるのだという。“Browning takes a crime to test character; for a crime can test character as well as a virtue.”(p.274)と更にPhelpsは続けて言う。彼の言うようにBrowningはたしかに多くの作品の中の人物の道徳的特性や性格を評価する時，罪という試金石をもって考慮している。

Phelpsに言わせると，心の純潔なる乙女と，腹黒い悪漢が，共に法にふれる犯罪を犯していなければ，法の前には全く無罪であり，罰することは出来ない。しかし，Browningの主張するように1人の個人という立場に立って各個人を見るとき，或はキリスト教の立場から考える時，善と悪の区別はその心の如何によって決定される。この2人の恋人の場合，法を犯すことはしなかったが，そのために1生を棒に振ってしまった。2人は心の中で姦淫の罪を犯したからばかりでなく，その上に，キリスト教の禁じる臆病と怠惰の罪を上塗りしたことで罪に問われる。故に追放されたのだ，と説く。

Browningは読者の疑問に対して次の様にのべる。

I hear you reproach, “But delay was best,
“For their end was crime.” —Oh,a crime will do
As well, I reply, to serve for a test,

(ll. 226—228)

As a virtue golden through and through,
Sufficient to vindicate itself
And prove its worth at a moment's view!

(ll. 229—231)

私があなた方が次のように反対の声をあげるのを聞く。「でも，ほんとに2人がぐずぐずして，実行するのを遅らせてよかった。罪悪を犯すことを免れたから！」と。それに対して私は，あゝ，だが罪を犯すことも，(心の底まで純潔

であり，自分自らの真正を立証し得るなら，）一見しただけでその真価を証明出来る徳行と同じように，試練に役立つものである，と答えましょう，という。

Dallas Kemareはこの有名な詩の中には“…complicated problem of accepted morality versus the true good…”[21]が取り扱われていると，コメントし，次の様な意見を述べている。新妻が例え自分の嫌いな夫と夜をすごしたとしても，それは罪悪を構成しない。当時としては，普通，結婚生活は厳正にして，聖なるものと考えられていたから，夫人は夫に貞節を守り続けた。厳密に言えば，一方では1人の男性に自分の肉体を委ねながら，他方では，自分の精神と心とを，他の男性に捧げていたとしても，それは罪とは見なさなかった。この場合，肉体的な罪が精神的な罪悪より重大であるか否かは，主なる神の定め給う所であろう。（“Technically, there is no sin in surrendering the body to one man while mind and heart live with another;it remains for God to judge whether the physical sin be graver than a spiritual crime. Such are the profound and complex issues.）[22]KenmareはBrowningはこの詩の中で何ら善悪の審判を与えていない，むしろ読者に審判をゆだねているという。彼はBlakeが，“I come not to teach, but to awaken.”と言ったことに共鳴しそれを実行していたのかもしれない，と推定する。

次にBrowningは232行目から話題をゲーム遊びに変え，彼らしい論を展開する。例によって難解で，理解するのに骨が折れた。

Must a game be played for the sake of pelf?
Where a button goes, ‘t were an epigram
To offer the stamp of the very Guelph.

(ll. 232−34)

“The true has no value beyond the sham:

(21)と(22) Dallas Kenmare; *An End to Darkness. A New Approach to Robert Browning* (Peter Owen Limited, London, 1962) p. 131.
(23) counter＝ゲームの数取り〔得点を数えるための円形の金属・象牙・木等の小円板。〕

As well the counter[23] as coin, I submit,

When your table 's a hat, and your prize a dram.

(ll. 235−37)

金銭のために，我々は勝負しなければならないのだろうか。ボタンで間に合うのに，本物のGuelf家出の英国王の頭に極印を押した金貨を，差し出すのは全くくだらぬことで，私は私の意見として述べるが，勝負をする時，ほんものは，まがい物以上に全く何の価値もない。しかしあなたの賭博台が帽子で，賞金が1杯のお酒である，という勝負をすることに楽しさを覚えるという場合にはcounter（即ち得点を数えるための円い金属）も金貨も全く同じく役に立つものである。

Stake your counter as boldly every whit,

Venture as warily, use the same skill,

Do your best, whether winning or losing it,

(ll. 238−40)

If you choose to play!−is my principle.

Let a man contend to the uttermost

For his life's set prize, be it what it will!

(ll. 241−43)

いやしくも自分自らが賭け事をしようと決心した以上，あなたの持っている'Counter' を思い切って，大胆に賭けなさい。勇気を出して，慎重に，本物を賭けるときと同じ技量を用い，最善をつくしてやりなさい。勝つにしても，負けるにしても，と言うのが私の主張する所である。

人は自分の掲げた1生の目標に向かって，結果はどうなろうとかまわずに徹底的にやり抜いて行くべきである。

The counter our lovers staked was lost

As surely as if it were lawful coin:

And the sin I impute to each frustrate ghost

(ll. 244−46)

Is—the unlit lamp and the ungirt loin,
Though the end in sight was a vice, I say.
You of the virtue (we issue join)
How strive you? *Do te, fabula!*

(ll. 247−250)

ところがこの詩の主人公たちも一度は賭に挑んだ。しかし彼らの決意した大目的は不幸にして道ならぬ恋の成就であった。つまり正貨でない "counter" (まがいもの) であった。彼らが賭けて得ようとしたものは，正当な結婚という金貨ではなくて，不議姦通という 'counter' であった。それでもこの 'game' は，2人の真実性と熱情を試めす大切なものであったが，勇気と努力に欠け失敗に終ってしまった。Browningは，もし2人が互に愛し合いながらも，あのように，一生ふん切りをつけることが出来ないのだったら致底，正当な結婚という金貨さえも，獲得出来なかっただろう，と断言している。更に彼は，恋に破れた2人の目的が，例え罪深い姦淫の罪であったとしても，私は彼らが，点されるべきご筈の灯火を，点すこともせず，締めるべき筈も帯も，締め得なかった煮え切れぬ態度の罪の深さが，彼らの不幸の原因となったのだ，と力説する。

最後にBrowningは有徳の士ぶって，まだ彼に対して不満を感じ，議論をしたく思っている人々にあてゝ，終りの2行をかく。大意は次の如くである。

あなた方よ，私の書いた此の物語は，皆さんと無関係でありませんよ。あなた方はあくまでも二人が高潔であらねばならないとし，姦淫の罪を彼らが犯さずにすんでよかったと思っているのでしょう。あなた方自身がもしこの様な問題に直面した時，見事な解決が出来ますか。これは人事(ひとごと)ではありませんよ。ともあれ，此の二人の恋人たちのように，無為なるが故に，罪を犯さずにすんだことにより，つまり悪を行うことから免れるようでは，結局善をも行えない，ということを，心に銘じていてもらいたいのです。

以上でこの長い詩全篇とその「後記」は終る。

次にこの詩に関する意見と評価を数人の批評家から聞いてみたいと思う。先ず第1にPhelpsの意見を聞いてみよう。

"I find Browning's poem both clear and morally stimulating. My one objection would be that he puts rather too much value on mere energy. I do not believe that the greatest thing in life is striving,struggle, and force: there are deep, quiet souls who accomplish much in this world without being especially strenuous. But in the sphere of virtue Browning was essentially a fighting man."(24)

PhelpsによればBrowningは人を高貴たらしめるために，常に努力し，どんな困難にもひるまず，立ち向かって前進することが必要である，と強調しすぎる嫌いがある，ということになる。

読者がこの作品について疑問を抱いた箇所につきJames Fotheringhamは次のように解答を与え，この詩の持つ真の意味をよく解明してくれる。

"Virtue does not lie in indecision and delay, and final indifference and futility—a statue and-bust sort of life.…And the poet puts his point here in certain strong words that have been a trouble and even an offence to some of his readers. "A crime will serve for a test as well." What can he mean? He means, that a negative and indolent virtue is no virtue at all; that to keep from action on immoral grounds is itself wrong; that the last danger and the most hopeless wrong is to palter and conventionalise, to chill the heart, and paralyse the will ····To live is our only chance of coming right; to be dead even while

(24) William L. Phelps; *ibid.*, p. 277.

we live is the greatest of wrongs…. Live heartily and with purpose, whatever you do, and you will come at the Maker's morality. Don't dream or vacillate your life away"[25]

S. Orr夫人はこの詩の中心思想につき簡単明瞭に次のように言う。*"The Statue And The Bust* is a warning against infirmity of purpose." と。

前述のPhelpsのBrowning批評に輪をかけたような調子で，Sir Henry Jonesはこの詩のll. 242－250を引用し，熱烈に詩人の声を賛えつゝ下記の，如く説明を加えている。

"His (Browningのこと) code contains no negative commandments, and no limitations; but he bids each man let out all the power that is within him, and throw himself upon life with the whole energy of his being. It is better even to seek evil with one's whole mind, than to be lukewarm in goodness. Whether you seek good or evil, play for the counter or the coin, stake it boldly! … Indifference and spiritual lassitude are, to the poet, the worst of sins," [26]

前述の3人の研究者たちは，大体道徳的立場に立って，この詩の問題点の解明をしようとした。が，もう1人，宗教的立場からこの作品の評価を試みているThomas Blackburn[27]の説明に耳を傾けてみよう。

" *'The Statue and the Bust'* also examines the sterility of two people who have failed to implement their mutual destiny." と彼は2人の未熟さを指摘する。そしてll. 226－231を引用し，"Where meeting is destiny, conventional morals are irrelevant." (1組の男女が一目惚れしてしまう出

(25) James Fotheringham; *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (Horace Marshall and Son, London, 1900) p. 209～210.
(26) Sir Henry Jones; *Browning as a Philosophical and Religious Teacher* (Glasgow, James Maclehose & Sons, 1912) p. 104－105.
(27) Thomas Blackburn; *Robert Browning, A Study Of His Poetry* (Eyre & Spottiswoode, London, 1967) pp. 82－83.

会いが，運命的なものであるなら，道徳的立場から，とやかく言うことは全く見当違いである。）という立場をはっきり打ち出す。Browningが *"An Epistle of Karshish"* [28] の中のLazarusを通して確認したように "…there is a morality of eternity which transcends that of time. Since these two people were each other's destiny they have sinned against this timeless morality." と，実に興味深い見方をする。ついでBlackburnは ll. 224－246 を指摘して "Having failed in life the protagonists of *The Statue and the Bust* have gone, undeveloped, into Death. Negation is not a virtue." とはっきり，きめつける。それからBrowningの「後記」の初めの所（ll. 214－225）に戻り，次の様に論をすゝめて行く。

> "Action is of time, 'being' of eternity. But one's action in time, or lack of it conditions one's being in eternity. The frustrate ghosts of *The Statue and the Bust,* since they failed to act in time, fail to 'be' in eternity. One can only act rightly and do good through those particular details of conduct which accord with one's particular destiny. The destiny of the Duke and the woman cut across the dictates of current morality. Since meeting was their fate, their sin was 'the unlit lamp and the ungirt loin', disobedience to an intention of life which was greater than their individual personalities." [29]

以上のように整然としたBlacburnの説明を聞けば，Browningがこの詩の中で言わんとした真（まこと）の意味が更に明らかになると思う。

最後に Browning がこの「騎馬像と胸像」に関聯して，自分自身のロマンチックな冒険的な愛と結婚について夫人に語った言葉を De Vane が思い出

(28) *An Epistle Containing the Strange Medical Experience of Karshish the Arab Physician* (*Men and Women*).
(29) Thomas Blackburn; *op. cit.*, pp. 83－84.

して書いているので下に引用しておきたい。これをみても詩人がどんなに深いおもいをもって，この作品を書いたかがうかがえる。"It is interesting to recall, as a commentary on the ethics promulgated in the poem. that Browning was fond of saying to to his wife that it would have been wrong if they—the Brownings—had not married."[30]

おわりに

この作品は社会的な，道徳的な，宗教的な，多くの問題を含んでいるので，Browningは読者から，かなり質問攻めにあったらしい。確かに，彼の詩は難解であるとの定評はあるが，虚心坦懐に，念入りに，何度も作品を読み返してみれば，自ら真の意味が判るようになると信じる。筆者もそうしたつもりである。

参考文献（脚注にある以外のもの）

Robert Browning. Men and Women「ブラウニング・男と女」大庭千尋訳　国文社・初版1975. 3.15.

(30) William Clyde DeVane; *ibid.*, p. 209.